

笑福亭喬介／咲くやこの花インタビューvol.20

笑福亭喬介(しょうふくてい・きょうすけ)【平成 30 年度 大衆芸能部門[落語】】



どこか口笛でも吹くように、気負わず飄々とした語り口で笑いを誘う、落語家の笑福亭喬介さん。古典落語を中心に、軽妙で明るい話芸が持ち味。上方の「あほ」を演じる、とぼけた味わいも魅力です。また、特技を活かし、「彦八まつり」の宣伝動画を制作する一面も。大学卒業後、2代目笑福亭三喬(現・7代目笑福亭松喬)に入門。なにわ芸術祭新人賞ほか受賞歴多数。2020年は噺家生活15年の節目に、初の独演会に挑みます。「今できる最高の舞台を」と意気込む喬介さんに、これまでの歩みと独演会にかける思いを伺いました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「大学で初めて見た落語がめっちゃ面白くて。あ、落研入ろって」

小学生時代は登山家に憧れたそうですね。



小学校の先生が何気なく植村直己の話をしたのかな。それでどんな人物なんだろうと親に頼んで本を買ってもらって読んだら、このひとすげえなど。背がちっこくて山登りなんて無理やろうと言われてたのに、山岳部に入って。最初は体力もないところから努力して。その後、世界的な山岳家になっていく。よし、僕もこんな人間になろうと思いました。

中学校では晴れて山岳部員に。

親には「これで生活する」と言ったらアホかと言われました。生活できるのはスポンサーのおかげ。相当な努力しないと、そんな人にはなれへん。確かにそうやなど(笑)。

夢は夢として終わったのですね。高校では登山部が無かったこともありバレー部へ。その後、近畿大学へ進学されます。

高校生の時は学校が嫌いで、ほとんど勉強しませんでした。ノートとった覚えがないですね。三者懇談で担任が言うわけです。「行ける大学なんてまずない。専門学校を用意したるから手に職つけて、それで就職しなさい」と。なんで勝手に将来決められなあかんねんと。まあ、喧嘩みたいなかんじですわな(笑)。

おお！

確かに勉強してない自分も悪いと。親には1年間だけ予備校にいく時間をくれと頼みました。はじめてですね。後にも先にも、あの1年間だけ勉強しました。

1年後に見事、近畿大学文芸学部に合格されました。

高校の担任に言われた「専門学校やったら」の言葉が頭にあったので、大学は総合大学にしようと決めました。総合大学ならいろんな人がいるので、自分の視野も広がるだろうと。今なら分かるんですよ、工業大学でも経済大学でも、同じように広く学べるってことは。ただ、当時は知識がなかった。なぜ近畿大学だったか？ それは一番最初に受かったから(笑)。



大学では、今に通じる「落語講談研究会」へ入部されます。

兄貴が2人いまして。長男はクラブに入ってなくて「大学は面白くない」という。真ん中の兄は大学の内外で野球のクラブに入っていて「大学は楽しい」という。これはクラブはやらなあかんなど。僕は人前に立つとか、喋るとかは苦手やけど、発表の場がある方が頑張れそうな気がするし。そこで、たまたまもらった落研のチラシに「新歓寄席」とあったので、その足で向かいました。落語とか知らんし、観に行ったらと。

そこで初めて、落語に触れられたのですね。

今でも覚えてます。トップバッターに真っ黄色の着物着て、男前やねんけど頭に思いっきりリーゼントに近いパーマをあてた兄ちゃんが出てきた。1個上の2回生の先輩で、彼が「二人癖」という落語をしたんですけど、それがめちゃくちゃ面白かった。落語って面白いんや。あ、入ろうと。

その“黄色い先輩”というのが、現在講談師としてご活躍の旭堂南龍さんというのも驚きです。

クラブでは近大亭風助さんを名乗っていたので、今でも風助さん。ちなみに「近大亭」は男前にだけ許された亭号。他にも、「梅の家」は天才か変人か紙一重なひとがなって、名前に狂、酔、爆、笑などの一文字を使う。あと「扇」は名前に数字を一文字入れるとか、色々ありました。ちなみに僕は、梅の家成狂(ナックル)でやってました。

入部して「これだ！」と思われたのですか。



僕ずっと辞めようと思ってたんです(笑)。合わなくて。でも2ヶ月に1回寄席があるから、何かしら手伝いをしてるうちに、ずるずると2回生の春合宿にまでなった。ところが、この春合宿で今までそんなに喋らなかった1個上の先輩ともすごく楽しく過ごせて。あれ？ おもしろいなと。そこで同期とも打ち解け合って徐々に仲良くなって、近大亭風助さんもいいひとやなと。2回生の春からやっとなり落研が楽しくなり始めました。

発表の場も楽しめた？

発表はだいたい適当。学生なのでみんな遊ぶんですよ。風助さんは熱心な方でしたけど。覚えたところで普通にやってもできませんから、ここは省いて、後は適当にやったらうとか。どこを省いて、何をどう活かすか。そのやり方は今めっちゃ役に立ってますけど(笑)。えらいもんで、若い時って記憶力もすごいですよね。同期の乾くんがやった「皿屋敷」が面白くて、2回聞いただけで覚えました。ゼミの合宿で落語してと頼

まれたときも、自分のネタは忘れてたけど「皿屋敷」はできましたからね。あの脳みそ今欲しい！ どこ行ったんやろな(笑)。

「遊んで暮らすつもりが、年季あけたら空前の落語ブームでした」

落研の活動が楽しくて、落語家に？

落語家になろうとは、全く思っていないですよ。自分は親に1年間お金と時間をもらって、自分の道を決めようと大学に入ってますから。いろんなことを経験しようと。バイトはアミューズメント系から塾の先生、大阪ドームのチケットのもぎりとか結構たくさんやりました。あと引っ越し、あれはしんどいわ。



落研のクラブのほかに、学内でも文芸学部学生自治会に参加されるなど活発に活動されたそうですね。

自治会は、学部内の問題を取りまとめる、各学級委員の長のような連中の集まりです。あと一応取れる資格は全部取ろうと、国家資格の前の段階ですけど、地理歴史教員免許、司書、学芸員の資格は取りました。

落語家という選択肢はいつ頃、浮上したのでしょうか。

ある時、風助さんが「俺プロになりたい」と言い出したんです。しかも、落語ではなく「講談が面白いから」と習いに行き出して。「無理やって」と言ったらすぐプロになったから、「え？」って(笑)。1個上の先輩がすぐプロになれるんや。じゃあ、俺は落語家になろう、とそこで決めました。

お2人とも有言実行されていて凄いです。喬介さんが平成 30 年度「咲くやこの花賞」を受賞された翌年に風助さんこと、旭堂南龍さんも同賞を受賞されました。

南龍さんの受賞は嬉しかったですね。定期的にしょうもないラインが来るんですが(笑)、またそれかと思っ
て見たら、受賞を知らせるスクリーンショットが送られてきて「まじか！」と。めっちゃ嬉しかった。最近で
一番嬉しい出来事でした。



大学卒業時には、喬介さんがどの師匠に弟子入りするかも、南龍さんにご相談されたそうですね。

落語家って山ほどいてどの師匠につけばいいか分からない。南龍さんに話したら、そうかと。今は大先輩
より中堅どころや。毎月やってる「そばの会」に出てた、笑福亭三喬という人がものすごい良かったよと。
で、改めて見に行ったら、やっぱりこの人スゴイ人やなど。(笑)。

喬介さんが感じた“上手さ”とは？

他の落語家と違う、不自然さがないなど。落語って基本的に不自然の連続や思うんですけど。だってあり
えないですもんね。「こんにちは」「ああ、お前かいな。さあさあ、こっちお上がり」なんて。みんな落語家が
“落語をしよう”と演じてる。落語調でありますよね、僕それが不必要なと思ってるんですよ。常に自然体
が一番面白いと思ってます。そこが三喬師匠は凄いなと。「よし、この人の弟子になろう！」と(笑)。角座
の出番終わりで「弟子にしてください」と声をかけました。

ご両親には、なんと報告を？

最初はね。無理やろとは、言われました。僕も思いますわ。あんまり人と喋るのは好きやなかったし。なんで落語は止めなかったんやろ。分かりませんが。僕が思ったのは、楽しそうな世界だなと、まずね。そんなにあくせく働かなくていいのかなと。当時は落語家なんて先細りの時代でしたから。なる人も少なかった。僕も3年経って年季あけた時に、1ヶ月に2、3箇所仕事があればいいなという感じ。あとは遊んで暮らそうと。



理想的かもしれませんが(笑)

と、思って入ったんですよ。でも年季あけたのがちょうど繁昌亭ができて1年後ぐらいで、NHKの朝ドラ「ちりとてちん」が終わりかけで、世間に空前の落語ブームが来てた。ありがたいですよ、ありがたいねんけども。年季あけたのが6月で、その3ヶ月後の9月から翌年の3月近くまでは、毎日仕事が入ってました。寄席も朝と昼、昼と夜とかやってね。休みが一切なかったですね。

家には寝るためだけに帰って。

忙しくて落語覚える時間がなかったですね。その状況を何人かの後輩たちは見てますから、自分たちもこうなれるんやと思ってた。でもブームはその後落ち着いて。多分僕が一番得したんやと思います。

「落語が楽しいと思えるのは1年に1回あるかないか。大変やけどでも面白い」

2020 年で入門から 15 年目を迎えます。これまでの歩みを振り返り、ご自身が思う 3 大ニュースは？



平成 28 年にもらった「なにわ芸術祭新人賞」。その時の出演者がほぼ全員先輩で。桂鯛蔵、桂吉の丞、桂雀太兄さん、桂そうばくんが唯一下やったかな。全員で 7、8 人ぐらいおって。このメンバーに勝ったらおもしろいな。このネタでいこうと、「牛ほめ」なんですけど。決められた時間内に短くして、さらに自分らしさを入れて「これで勝負したれ！」と思ったときに、実際優勝できたことは嬉しかった。これは嬉しかったですね。一番嬉しかったんちゃいますかね。

突き詰めて来たものが、間違っていなかったと。

そうですね。あと「咲くやこの花賞」もめちゃくちゃ嬉しかったです。獲れると思ってませんでしたもん、大衆芸能部門。いうたら浪曲、講談、落語、漫才、新喜劇、いろんな分野のひとがいてる中での受賞ですから。これは嬉しかった。歴代の受賞者も結構な顔ぶれで。大師匠の 6 代目松喬さんも昭和の最後に獲られている。僕は平成の最後で獲らしてしてもらって「やったー！」って。



受賞の際は「いただいてからが勝負」とのコメントも。

受賞後最初の2、3回は「まあ、がんばっとるな」。でも、それが永続的には続かないと思うんです。だんだん見る方も目が肥えてきて、「またおんなじことやってる」となれば、落ちていきますよね。ありがたさ以上に「頑張らないといかん」というのは、どの賞に対してもありますね。

落語人生のなかで落語に対する好み、考え方などに変化はありますか。

もっとうしょうとは毎日考えますね。今日も昼、落語してるときに下手やな。何でこんなに面白くないんやろ。ショックやわと思ってたら、後輩が「いや楽しいですね〜」って。(笑)。

落語はおもしろいですか？

面白いな、楽しいなと落語やってるひとは羨ましいと思う。僕は1年に1回あるかないかですね。以前、東京の柳家さん喬師匠が大阪来た時に、聞いたことがあるんです。「落語してる時、楽しいですか？」って。現役の中でも東西きってのトップクラス、いわゆる名人に入る方。70歳を過ぎて、芸歴50年を越えていますよね。そのひとが「逆に喬介君はどう思う？」と。僕は「楽しくないです」と即答しました。

大師匠の答えが気になります。

自分が思ってる落語をやれたとしても、ウケへんときってありますねん。逆に「これは違うな」と思ってるときに、お客さんがウケてるときもある。僕の中で、「俺今日できてる、お客さんもバンバン乗ってくれて、めっちゃ楽しい！」というのは、1年に1回あるかないか。合致することは滅多にないんですよ。そういのを師匠に喋ったら、「僕もそうや」と。

同じ気持ちだったんですね。



たとえ、その日の舞台がよくても、次の日の舞台がよくなるわけでもない。それはいつ来るか分からない。でもその1回を目指して僕らはやっているんじゃないかなと。それ聞いて「うわ！カッコいい」って。数年前に頂いた言葉ですが、それ以来ずっと心にあります。

聞くにつけ、大変な世界に入られましたね。

でも面白いですね。そう考えると。しんどいことも多いですけど。そういう部分では、もしかしたら楽しいかもしれせん。

「落語のCMを作って、動画サイトで流したら面白いんじゃないかな」

初の独演会はどんな会にしよう？



多分自分の好きなネタしかしません(笑)。何回か聴いてるネタでも、楽しんでもらえる落語ができればと思いますね。だからあえて挑戦的なネタはしない。

「崇徳院」は、小倉百人一首を題材に、町人の恋模様を描いた滑稽噺です。

うちの師匠の落語を聴いて、ああ、おもしろいな。やりたいなと思ったネタ。トップクラスで好きなうちの師匠のネタは入れとことうと。僕自身も好きで、苦手やったらやらないですよ。ものにできてるかは知らんけど(笑)。

「七度狐」は伊勢参りに向かう喜六と清八のコンビが、執念深い狐の恨みをかい、次々に化かされる姿を面白おかしく描くもの。

やっぱり教わった通りにやってもウケませんね。「七度狐」も昔はそうだった。だったらどうするか。喜六と清八の人間関係はどうかと考える。友達同士ですよ。そしたら、そこを決まり切った台詞でやってると、他人同士ぽいじゃないですか。僕はそれが嫌いで、もっと2人はフレンドリーに山道を歩いてても楽しんじゃないかなと思うんです。

三席目は、当日のお楽しみですね。

今これめっちゃ考えてます。初めて見るひともいると思うので。30分、40分のどっしとしたネタは酷やと思います。まずは楽しんでもらう1席を。気持ち的には、お客さん全員が楽しんでもらえるような会にしたいですね。静かに見るもんでもないので、大いに笑っていただけたら。

今後の目標や2020年の抱負など。

覚えたい落語もいくつかありますが。プライベートではフィリピンですかね。現地でのダイビングが、僕の唯一の楽しみです。あと、映像作るの好きなので、これをもうちょっと充実させていきたいなど。



「彦八まつり」でも本格的な動画を制作されています。

去年は30数人に出てもらいました。その半分以上が先輩。となると、絵コンテを書いておかないと段取りが大変で。繁昌亭、生國魂神社と、場所もいろんな所で撮るので、次のシーンの後に、またこのシーンに戻りますとかやったら、多分皆さんキレると思う(笑)。

最後に、独演会を楽しみにされているお客様にメッセージを。

初めての独演会というのは、今回限りのこと。自分が一番楽しい会かもしれません。だから、お客さんも楽しんでもくれるような気がします。そういう会でありたいですね。

★大阪名物を訊く！【私の、咲くやこの花賞】……

小さい時から遊園地が好きなんで、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン。年間パスが切れちゃったんで、大阪市とかくれませんかね(笑)。でも何やかんや言うて、言葉ちゃいます？ 大阪弁は聞くと、安心しますよね。不思議なもので、東京行った時も「やかましいな」と思ったら、やっぱり大阪弁でした。ほっとしましたね(笑)。やっぱり、生まれ育った時から聞いているから、慣れ親しみがあるんでしょうね。

